

1.1. 街並景観の修復、町家住宅の復権の試みと町の活性化

出雲崎妻入りの街並景観推進協議会 + 長岡造形大学
(新潟県三島郡)

1. 活動の背景と目的

1. 背景

「都市問題」はどの都市も抱えているが、出雲崎町はとりわけ「高齢化問題」と「過疎の問題」が町そのものを解体の方向へ導きかねない状況にある。かつて天領として栄え、文化的に興隆し作り上げた街並と妻入りの町家形式の住宅が急速に消滅しようとしている。北国街道の旧道にそって、3.6kmに渡り、町家が780軒連続し、その内669軒が妻入りの形式を持ち、全国的に見てもその名を馳せた重要な町であった。しかし、現在の浜筋では2000人程度の人口しかなく、そのうち、老人世帯が40%を超えている地区もあり、「高齢化問題」と「過疎の問題」が町のあちこちに空家や空き地を生み出している。

本来出雲崎地区は狭い敷地に間口が狭く奥行の深い、妻入りの町家形式の建物が軒を接して連続していて、日本海の荒々しい環境に集団として立ち向かっていたが、このように隙間ができると、各町家に対する環境的な影響が大きくなり、それぞれの町家の存在基盤がゆらぎだしてくる。新潟県にとっても非常に貴重な歴史遺産である、出雲崎の町を後世に受け継ぐためになにをしたらよいか、今問われている。

長岡造形大学では、「出雲崎2020プロジェクト」を立ち上げた。これは江戸時代から明治大正の300年間に、出雲崎が築きあげてきた町家の形式と町の形式を後世に伝え継ぐためのプロジェクトであり、21世紀の高齢化社会に対応した町「時速10kmのまち」を実現させるプロジェクトである。この活動では都市的側面と建築的側面の2つの側面からのアプローチを試みている。

2. 目的

「町を後世に受け継ぐためにはどうしたらよいか」ということが調査研究の大きな目標である。

町を支えている2000人という人の問題、これは高齢化の問題であったり、雇用機会の創出の問題とも関連してくる。さらに密集と防災のあり方についての問題、これは都市的側面の問題だが、出雲崎はことに重要な問題でもある。大火災発生の危険は常にはらんでおり、崖崩れや津波の心配も常にある。また建築的側面では町家形式の妻入りの住宅をいかにして保存し、後世にこの形式を受け継ぐことができるかという問題である。



出雲崎の全景

日本海と絶壁の山々の間の狭い土地に、3.6kmに及んで町家住宅が立ち並んでいる。狭い間口を隙間なく日本海に向け、荒々しい環境に立ち向かった。

さらに、町の活性化の問題もある。観光の町として立町するのか、長岡市のベッドタウンとしてなのかを考えなくてはならない。そのためには、これらを具体的に調査研究する必要がある。以下の項目があげられる。

①学術的な調査研究

- ・建物実測調査による建造物の研究、文献調査による町の歴史的な研究
- ・都市空間のつくられ方に関する空間的研究と社会的研究

②町に対してさまざまな空間やシステムについての提案

- ・調査研究を踏まえて、毎年何らか提案を町民に対して発表

③実践活動

大学は研究と教育の場だが、町というフィールドも同時に研究と教育の場でもある。平成12年度は、③の実践活動に重点をおき、「福祉社会とはなにか」をテーマとして調査研究をし、時速10km/hの町づくりを目的と設定した。

II. 活動の内容

大学と「出雲崎妻入りの街並景観推進協議会」と協力して以下の調査研究を行った。

1. 町家の調査

2. 町家修復交流センターの設置

(1) 調査民家（野尻邸）を借り上げての実測調査

野尻邸（旧小林邸）は平成11年に、出雲崎に寄贈された。尼瀬地区の稲荷町の浜側に位置し、海側に出雲崎漁港、山側に稲荷神社がある。調査によると、炭屋を営んだり大正の初期にはタクシー業をしていたようであるが、近年はミセ部分を二分し南半分を倉庫として貸していたようである。

①建物の実測調査

他の家屋同様、大学院生と学部4年生によって構造物から建具の寸法、素材などの細部まで実測して図面におこし、現状の把握に役立てた。

②構造材の材質調査

構造の専門家とともに構造材の材質を以下の項目に沿って実測調査した。

- ・平均年輪幅・含水率・密度・圧縮（横）・圧縮（縦）・曲げ・せん断

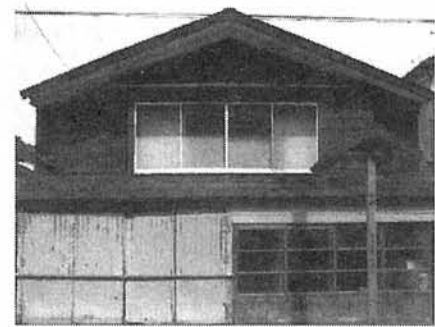
(2) 交流センターへの改造設計

実測した野尻邸を「町家修復交流センター」として改造する。「町家修復交流センター」は、今後まちづくりの拠点となるように公開町家とし、町の人々、長岡造形大学、推進協議会、役場、他大学など広く利用されるとともに、町を訪れる観光客にも開放することを目ざし、町全体が博物館として機能する一歩としたいと考えている。また、今後800軒余りある出雲崎海岸地区の町家の改修のモデルとして、改修の方法、特に耐震補強、



出雲崎の街並み

天領として栄えた時代には、できるだけ多くの世帯を住ませるため、そして間口の大きさを税額を決めていたため、なるべく狭い間口で細長く町家を建てて町並みを形成した。



野尻邸正面

省エネルギー対策、水廻りの改修方法などを提示する役割を持たせる。

実測からおこした図面を基に、出雲崎の特性である町家形式を組み込んで設計に取り組んでいる。まだ決定の段階には入っておらず改善の余地がある。

3. 時速10km/hの町の実験

電動三輪車や四輪自転車などの設置によって町の活性化をはかるシステムの構築とその実験を行う。高齢化が進むにつれて考えなければならないのが「移動の安心」と「自分の体力に合わせた移動手段の選択」ということではないだろうか。現状は、自転車に乗れなくなると手押し車くらいしかない。そこで、選択の幅を広げるために電動三輪車の導入を試みることになった。徒歩にも不自由を感じている高齢者が、積極的に町に出て用を足し、その上コミュニケーションすることができれば、町は格段と「いきいき」する。

【電動三輪車などのレンタルシステム】

- ①協力家屋の選定（各町1軒）
- ②ミセ部分に共用の基地をつくる
- ③貸出拠点の数を全町に確保する
- ④電動三輪車の乗り方の講習会の実施
- ⑤サービス
- ⑥使用料金・維持管理

平成13年4月、協議会の幹事会議において電動三輪車を渡した。町民にモニターを募集したが現在応募者は出ていない。そこで、まず協議会会員が実際に町の中を乗り回して、どんなものなのかを示しアピールすることになった。今後はモニターを選出し、使い勝手や段差などの運転しづらい場所を調査し、この実験の実践に入る。

4. 出雲崎妻入り街並景観推進協議会との共働

(1) 先進地視察

地域の個性を活かしつつも自らの創意工夫で居住環境を魅力ある「町」にしようと、早くから景観保全活動に取り組んでいる町を実際に歩いてまわり、これからの出雲崎の景観保全活動に役立てるため各地を視察している。平成12年度は石川県金沢市を訪問した。

(2) 歴史の道ウォーク

年1回、街並保全の基本として開催している。平成12年度の8月に風情のある街並や歴史の話をしながら北国街道の羽黒町一円明院－尼瀬のコースを歩いた。

(3) 景観研究会・シンポジウムの開催

出雲崎の街並は本当にいい街並なのか、価値があるのか、全国の事例を参考にして研究を進めている。街並景観への理解と協力を仰ぎ、みんなで住み良い町づくりをしようとさまざまな分野の方々と意見交換の場を設けている。



野尻邸内装材の撤去

本来の部材を調査するため、後代に付け加えられた内装材を撤去した。出雲崎の町家に詳しい大工の方から、部材や道具の使われ方からみてとる建築年代の話などを伺った。

平成12年6月には、街並保存や町家の保存・修景に係わる出雲崎町建築士会と懇談会を開催した。まず「街並景観」そのものに関心を持つことから始めることになった。

街並調査では、最近空き地が目立つようになってきたとの報告があった。下水工事が始まったことが、取り壊しや建て替えの契機となってしまっているようである。建設課にもその問い合わせがあり、街並景観推進のことをピーアールしていくなど対処方法を探っていく方針である。

平成12年11月に町長と協議会・造形大学とで会議が開かれた。町家修復交流センターの建築にあたり、出雲崎町としては古い建材を残して壊れるよりも新築にして壊れないようにしたいという意向を示したが、出雲崎町の特徴を残して活かすために新築はさけるべきであり、出雲崎の形式と街並の雰囲気を保つように検討していくことになった。

(4) 街並美化推進

街並にきれいな花を咲かせようと「花いっぱい事業」に取り組んでいる。この4年の間に街並にはきれいな植栽の列ができてきた。平成13年度もプランタを52個製作し、1個1000円で売り出した。花の選定は、風に強いということから「シャリンバイ」に決定した。また長岡市の鈴木造園をむかえて緑化講習会を実施し大盛況だった。その後、4月14日に第2回緑化講習会が開催された。

街並の景観保全と併せて、街並を楽しく歩けるように「おもしろ看板の設置」事業も行っている。この街並には、長い歴史の中で築かれてきた文化や史跡があり、古くから伝えられてきた話や暮らしがある。これらの書き残されなかった話を発掘し、「いずもざきよもやま話」として看板を製作して紹介していく。平成13年4月には、「たいのたらい廻し」と「出雲崎代官所の移転についてのお話」の2つが完成した。今後は、「出雲崎代官所の話」や「名主の家は千畳敷」などの話を紹介していく予定である。

(5) かわらばん「妻入り」の発行

年3回かわらばん「妻入り」を発行している。協議会が行っている事業の進行状況を中心に、出雲崎の妻入りの街並に寄せる思いをさまざまな人々がさまざまな角度で綴っている。

III. 活動の効果及び今後の課題

平成12年当初、本研究のフィールドとなっている野尻邸は保存状態も良好で、少し手を加えるだけで、住民、観光客、大学との交流センターとして機能することが期待されていた。そのため、大学と町並推進協議会が共同してボランティア体制のもと「手作り」で伝統的町家を改造する企てをしたのである。

ハウジングアンドコミュニティ財団に助成を申し込んだ当初はこのような状況であった。平成12年4月から3ヶ月に渡って、



構造部材強度調査

長岡造形大学により野尻邸の実測調査を実施した。その結果建物の保存状態が悪く、殊に道路側のミセ部分についてかなり傷みがはげしいことが判明したのである。

一方、この野尻邸を利用して「住民交流センター」をつくろうというアイデアは長岡造形大学側も推進協議会も維持しつづけ、推進協議会の事務局（出雲町役場建設課）では交流センターに対する助成金を電源開発事業財団に申請し、受理されたのである。交流センターが町の公共施設として認可されたことになるのであるが、町側の要望として公共施設として耐久性があることが条件に付されたのである。そのため野尻邸のボランティアによる手作り風改修は断念し、今年度は構造調査を中心に行い、伝統的町家を保存しながらも町や住民の要望を満足するような交流センターの在り方を長岡造形大学と町並推進協議会が協議しながら考えることとしたのである。

本調査報告書は野尻邸について本年度行った調査分析の報告書である。伝統的建築物を保存修復し、それを将来に渡って使いつづけるために何をすべきかを本報告書は探ろうとしたものであり、野尻邸の次なるステップへ進むための条件を明示することを目ざしている。

野尻邸は明治初期のごく一般的な水準の町家である。したがって同年代に建設された、高水準の町家に比べると、構造断面も小さいことが判明しているし、材質も地場の杉と黒松を使っており、高価なけやき材を使ったものにくらべると見劣りする。しかし、このような一般的な町家こそ十分な手立てをして町として保存修復すべきものと考えられるのである。町はその総体が常に問題であり、総体とはこのような一般的な建物もその構成要素であるからである。

野尻邸の修復は故に、伝統的な形式を踏襲することになるが、構造部材は新しい部材で挿げ替えられるもの、断面を増加させて新材になるもの、現状の材木を利用するものが考えられる。また、新たに耐震補強として追加されるものもあろう。交流センターのプランニングや使い方については次のステップにおいて設計をすすめながら、住民を代表する推進協議会と相談しながら検討されることになろう。この交流センターづくりの活動を通して、まずは出雲崎の町づくりの第一歩を固めたいと考えている。